

子どもは未来である、 甲南女子大学国際子ども学研究センターの 設立10周年をお祝いして

小林 登

子どもは未来である。子どもは、永遠の過去から永遠の未来に2つのものを伝承しているからである。親から受け継いだ生命の力を、大人になって「遺伝」として次の世代に伝えることがひとつ、生まれてから家庭の育児、社会の保育・教育によって学んだものを、大人になって「文化」として次の世代に伝えることがもうひとつである。

しかし、子どもはいつでもどこでも危機にあり、育児・保育・教育が十分に機能しないと、子どもの体の成長、心の発達には損なわれることがある。すなわち、“Children at Risk”と言える。子どもの成長・発達を確かなものにするには、当然のことながら科学的基盤を作り上げなければならない。それに必要なのが「子ども学」「Child Science」である。

私が「子ども学」という発想をもったのは古く、次の大きな出来事が関係している。第1は、大学紛争直後の1970年に東大小児科教授に就任し、1971年春、東大再建の為、世界の医学教育、また看護学校長を兼任していたので看護教育も視察するよう、当時の文部省から命じられて世界の代表的な医科大学を訪問したことである。1ヶ月程かけて、ヨーロッパ、北アメリカ、オーストラリアの医科大学や付属する看護学部・看護学校を訪れた。その時に、指導的な大学では、教育を学際的に行っているのを見て驚いた。従来の解剖学、生化学などの縦割の講義はなく、肝臓の解剖学、生化学などと横につなげて、しかも討論形式で教えているのである。

また、1970年代後半、大平内閣総理大臣によって、日本の21世紀の在り方を探る為、色々な分野をカバーする若手研究者を集め、それぞれのテーマで論じあう私的な研究会がつくられた。私は小児科医として「家庭基盤の充実」と「科学・技術の歴史的展開」というテーマに招かれて勉強した。これが第2の大きな出来事である。科学哲学に余り関心をもっていなかった為、後者の研究会は私に強いインパクトを与えた。

21世紀科学のトレンド、特に人間に関係する科学のそれは、要素還元論を取り込み乗り越えて、関係学術分野を集めた統合的、包括的な新しいパラダイムの科学になるというのである。人間は生物的存在であり社会的存在でもあるので、文理融合科学についても話し合った。換言すれば、それは学際的な科学であって「人間科学」（ヒューマン・サイエンス）と呼べる。そんな中で、小児科医とし

ては当然、「子ども学」（チャイルド・サイエンス）の体系づけを考え始めたのである。

まず初めに、心理学者の小嶋謙四郎先生、文化人類学の原ひろ子先生、教育学の宮澤康人先生と一緒に「新しい子ども学」（Ⅰ.育つ）（Ⅱ.育てる）（Ⅲ.子どもとは）を海鳴社から1985、86年に出版した。その前の1984年には「ヒューマンサイエンス」（石井威望、清水博、村上陽一郎、小林登）も中山書店から出版している。

そして、1992年にはノルウェー政府よりNorwegian Center for Child Research主催の“Children at Risk”というタイトルの国際シンポジウムに招かれ、“Child Ecology”というタイトルで特別講演を行った。その時、ノルウェーの学者の言う“Child Research”こそ私の思う「子ども学」であると感じ、その出版の意欲に燃え、1999年に日本評論社から出版した。2008年には書き改めて、明石書店から「チャイルド・サイエンス、子ども学のまなざし」を出版することが出来た。

1996年、国立小児病院を退官し、甲南女子大学で「子ども学」の講義を受け持つことになった。最初に甲南女子大学を訪れキャンパスを見せていただいたのは1990年代の初めで、鯉坂先生が学長の時代であった。しかし、国立小児病院のナショナルセンター化の問題も関係して定年が延長され、実際に講義を始めたのは1996年になったのである。常勤は残念ながら短期間であったが、1998年に国際子ども学研究センター “International Center for Child Studies” を教育学科の皆さんの応援を得て設立することが出来た。子どもに関心をお持ちの学内の先生方と一緒に子ども問題を勉強し、国の内外に発言しようという目的であった。ささやかではあるが、その活動が現在につながっているのである。

注目すべきは、「子ども学」を私は“Child Science”と呼び、ノルウェーでは“Child Research”、甲南女子大学では“Child Study”と呼んだ点である。21世紀に入って、イギリスでも“Child Study”という言葉が使い始められた点は興味深い。“Child Research”も“Child Study”も、学際性を強調している点で共通しており、私の言う“Child Science”と同じである。日本語を「子ども学」としたのは、あえて背景に特別な学術体系をもたず、皆で一緒に、しかも対等に考えることを強調する為であった。

幸い、2003年には「日本子ども学会」 “Japanese Society of Child Science” を設立することも出来、年1回学術集会である「子ども学会議」を開催、会員数も500名近くなり、本年度で第6回を迎えることになる。また、女子系の大学に「子ども学」を冠する講座や教室も増え、その数はゆうに50を超し、100に近いという。

「子ども学」としてやらなければならないことは、1989年に「子どもの権利条約」が採択されてからの新しい児童観の確立がまずあろう。次に、当面する「子ども問題」 “children's issues” の解決がある。特に「子ども虐待」 “child abuse”、“child maltreatment” は、社会的、国家的課題と言える。そして、最後に挙げなければならないのは「チャイルドケアリング・デザイン」することである。子どものことを考え、配慮し、安全に安心して生活出来るようにすると共に、子どもが「遊ぶ喜び、学ぶ喜び、生きる喜びいっぱい」になれるよう、社会の全てをデザインするのである。従って、都市計画、教具・遊具などの「モノ」ばかりでなく、教育制度、法律、更には少子化対策などの「コ

ト」までチャイルドケアリング・デザインしなければならない。

現在のわが国の社会をみると、何となく「ガタ」がきているように見える。社会の基盤がこわれたとも言えようか。子ども問題ばかりでなく広く社会問題を見れば、どなたも理解されよう。それは豊かな社会の陰のようにさえ思われる。戦争に明け暮れた20世紀前半の科学・技術の成果が平和的に利用された意義は大きく、20世紀後半に入ってわが国を含めた多くの国々で物質的に豊かな社会が実現した。しかし、そこでは他人との協力なしでも生きていけるようになり、ゴミの山（生活廃棄物、産業廃棄物）が目立ち始めると共に、社会が変質してしまったのである。

豊かな社会では、人の心を読み取って優しく対応する必要がなくなった。その結果、隣の人のことを知らなくても、付き合わなくても生活出来るようになったのである。電車の中で老人や妊婦さんに席をゆずるような光景すら、目にしなくなってしまった。科学・技術を育てたカルテシアン哲学、自他分離から始まる要素還元論が、人間の思考の中に行き過ぎた個人主義を育て、豊かさの追求により物質万能主義、拝金主義も加わって、社会の人間関係を薄いものにしてしまったことがその大きな理由と言えるのではなかろうか。現在の経済恐慌も、そうしたことの現れにさえ見えるのである。

社会のタガを締めなおすには、人間関係を豊かにし、太い絆にすることから始めなければならない。それには、それぞれが人の心を読み取り、優しく対応する心を持たなければならない。まずは育児・保育・教育によって、子どもに優しい心、共感の心を育てることから始める必要がある。そして、子どもの心を育てるには、育児・保育・教育のチャイルドケアリング・デザイン、更には社会の全てをチャイルドケアリング・デザインしなければならない。その為にも「子ども学」の体系づけ、発展と普及が必須なのである。

20世紀冒頭、スウェーデンのエレン・ケイは20世紀を「子どもの世紀」に、と世界に呼びかけた。しかし、残念ながらそれを実現出来なかったことは周知の通りである。21世紀こそ「子どもの世紀」にすることがわれわれの責務であり、その責務を果たすには「子ども学」の体系づけとその普及が大きな柱となる。是非、甲南女子大学国際子ども学研究センターにはその活躍を通して、「子ども学」の体系づけと普及を目指していただきたい。